**探究的な学習の在り方に関する研究推進地域**

**連携中学校区：安芸太田町立加計中学校区**

**連携地域を構成する学校**

| 学校名 | 学級数 | 児童生徒数 |
|---|---|---|
| 安芸太田町立加計中学校 | 4 | 47 |
| 安芸太田町立加計小学校 | 8 | 103 |

（R4.11.1現在で記入）

## １　研究の概要

### （１）研究テーマ及び研究のねらい

自らの生き方を切り拓く基盤となる資質・能力の育成～ふるさとに学ぶ小中９年間を見通した探究的な学習をとおして～と題し，今年度，目標を実現するのにふさわしい探究課題・単元開発，探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力の設定，資質・能力に基づいた評価規準の研究，単元の指導計画に沿った評価計画及びルーブリックの研究を行う。

### （２）資質・能力の設定について

小・中学校がめざす児童・生徒像を想定し，「自ら求め・自ら考え・最後までやり抜く」ことを小・中学校で共通して取り組む。

### （３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

今年度の取組として，昨年度の反省から，①児童・生徒が苦労し，失敗から学べる探究を行う。②児童・生徒が自分の言葉で活動を行った理由を説明することができる。③自己の変容に気づくことができるよう，取組過程の足跡を残し，評価につなげる。の３つをポイントに昨年度開発した単元の修正・改善を行うこととした。また，小学校と中学校の連携を密にし，小・中学校ともに，児童・生徒が目指す姿を共有し，９年間の学びを組織的に行うことに力を入れた。

## ２　実践事例

【加計小学校５年生：太田川のまわり　加計小５年調査隊】

昨年度の取組を振り返り，昨年の５年生がどんな活動を行っていたのかを知ることから，活動を始めていった。それをもとに，児童は，学校周辺の興味関心を出し合い，自分たちで探究テーマを決定し，４つのグループに分かれて活動を始めた。それぞれのグループで児童自身がゴールを設定し，そのゴールを達成させるために，必要な情報を探し，手に入れたり，知りたいことを知る，会いたい人に会ったりする過程で，地域や人とのつながりが自然と生まれた。児童が試行錯誤する中で，地域のために頑張っている人がたくさんいるということに気付き，自分もその力になることができるのではないかと考えるようになった。児童が設定したゴール達成には届かなかったが，今後の取組につなげていきたい。

【加計中学校２年生：働く意義】

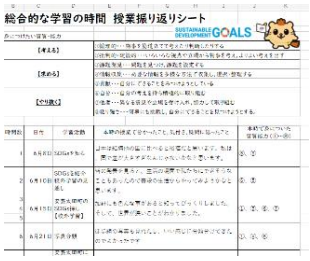
中学２年生を対象に将来の夢についてアンケートを行った。将来の夢をもっている生徒は19名中12名であり，やりたい仕事はあるけど…何となくこんな仕事につきたいけど…など自己の将来について具体的なイメージをもった生徒は少なかった。

はじめに，「なぜ働くのか？」と問いかけた。生活のためやお金のためと答える生徒が多かった。では「宝くじで10億円当たったら働かなくなるのか？」と問いかけると，「働かない」と答えた生徒は19名中１名のみであった。このことから，なぜ働くのか？自己の将来の在り方と関連しながら探究していくこととなった。職場体験活動を実施することができなかったため，安芸太田町で働く人の生の声を聞く機会がなかったが，町内出身者や町外で働く異年齢・異職種の方にインタビューすることができた。生徒は，自己の将来をよりよいものにするために，今自分たちにできることは何か考えるようになった。ただ漠然と将来について考えていた生徒も，将来のために，今はいろいろなことに挑戦することが必要，勉強を継続してやり続けることが大切など，中学校生活と結びつけながら具体的に考えることができるようになった。

**【個に応じた指導の充実】**

ICTを活用し，取組過程を見える化し，個々の活動を，児童・生徒と教員が共有することができた。また，個人思考の活動であっても，グループを設定することで，対話が生

まれ，対話を繰り返すことにより，新たな視点や活動の流れが明確になり，なかなか取組が進まない児童・生徒が，その後の活動に生かすことができた。




## ３　研究の成果と課題等

### （１）成果

①　興味・関心をもとに自ら探究したくなる課題の設定と

小・中学校共に，児童・生徒の興味・関心をもとに自ら探究したくなる課題を考え，地域の人とつながり，交流することができた。

「広島県児童生徒学習意識等調査」を参考として，中学２年生を対象に，昨年度と同様，６月，12月の２回アンケートを実施した。（結果は表１のとおりである。）ほとんどの項目において肯定的評価がアップしている。特に（44）（45）の項目において，大きく上回っており，県平均を上回った。生徒は，「働くこと」と「自己の将来の生き方」を関連づけて考え，さまざまな人の考えや生き方を知ることにより，将来についての考えが変わってきた。また，自己の将来の夢や目標について作文を通して振り返り，立志式やさまざまな発表の場での主張など，必然性をもって取り組むことができたことが，生徒が自分事として捉え主体的に取り組み，【自己実現力】の項目で肯定的評価が大きくアップしたことにつながったと考える。

②　相手を意識した単元づくりと，取組過程の評価

探究的な学習の取組を進めていく中で，ただまとめて発表するだけでなく，異年齢や異校種を意識して取り組むなど，相手を意識したまとめや表現の工夫，児童・生徒の取組過程を評価するために，ＩＣＴを活用し見える化し，振り返りの工夫を行ってきたことが，成果につながったと考える。

③　小中連携の取組

ア　小・中学校合同研修会の実施，研究授業への参加

４回の小・中学校合同研修会の実施，小・中学校で単元の開発，研究授業，事後協議の相互参加，学年や校種を越えてのグループ協議によって探究的な学習の在り方の取組についての共通理解，各学年の活動状況やつまずきの共有が進んだり，児童・生徒の発表や交流する場，活動を共にする場など，小・中学校が一緒になって取り組むことができるようになった。課題であった「教師の引き出し不足」において，学年・校種・経験の異なる教員と活動内容を共有し，探究活動がよりよくなるために一緒に考えていく中で，新たな視点や地域の人とのつながりなど，教員一人一人の知識が増え，探究活動への意欲向上につながった。

### （２）課題

活動の見通し，準備等の想定の難しさについて

地域の人や異年齢・異校種の方との交流や活動後のスケジュールなどの調整が児童・生徒主体では困難であった。また，準備に時間がかかり，実践から失敗したことや改善点を振り返り，次の活動にいかすサイクルを回すことができなかった。アンケート結果からも（23）の項目が6.3ポイント下がったことは，児童・生徒の思考の流れを停滞させてしまい，より深い探究的な活動につながらなかったからだと考える。

大きなサイクルよりも小さなサイクルをたくさん回し，失敗から学ぶことができる機会を多くつくることが大切である。

（表１）「広島県児童生徒学習意識等調査」加計中学校２学年20名

| （番号）・【領域】・内容 | 12月 | ６月 | 差 |
|---|---|---|---|
| （10）【学習習慣・学習意欲】<br>学習を最後までやりとげて，うれしかったことがある。 | 93.8 | 93.8 | 0 |
| （12）分からないことはそのままにせず，分かるまで努力します。 | 87.5 | 87.5 | 0 |
| （20）【まとめ・創造・表現】<br>授業では，自分の考えとその理由を明らかにして，相手にわかりやすく伝えるように発表を工夫しています。 | 87.5 | 75.0 | +12.5 |
| （22）【振り返り】学習の振り返りをするときには「どこまでわかったか」「学習方法でうまくいったことや失敗したことの理由」を考えています。 | 87.5 | 81.2 | +6.3 |
| （23）学習の振り返りをするときには，「もっと考えてみたいこと」，「もっと調べてみたいこと」，「もっと工夫してみたいこと」などを考えています。 | 81.2 | 87.5 | −6.3 |
| （44）【自己実現力】将来の夢や目標をもっています。 | 75.0 | 62.5 | +12.5 |
| （45）将来の夢や目標はかなうと思います。 | 75.0 | 43.8 | +31.2 |

### （３）今後の改善方策等

児童・生徒が主体となって単元を進めていくことを踏まえ，児童・生徒の活動の姿を教員がある程度想定し，ゆとりをもって準備しておくことが必要である。児童・生徒がどんな地域の人との出会いを求めるのか，どんな計画で進めていくのかなど想定しておくことにより，児童・生徒が考えた計画を教員の想定不足で，停滞させないようにファシリテートすることが可能になるだろう。また，１年間完結の探究活動ではなく，より児童・生徒が本気で探究し続けられるよう，児童生徒が，どんな探究活動を行っているのか，教員が見とり，児童・生徒がより深く考えられるようにしていきたい。